

実践編 第九回 『村明細帳⑥』

「村差出明細帳 宝曆十辰 月日」

(小川家文書D-4-17)

一板橋七ヶ所

内四ヶ所 長三間半

幅五尺

三ヶ所 長式間

幅五尺

右ハ御上水ニ四ヶ所野火留水道ニ三ヶ所

何れも通り往還之橋ニ而御座候、自普請ニ

仕候、尤古来ハ所々御林方御材木申請候得共

遠方旁々百姓困窮ニ付中川八郎左衛門様

御代官所之節右之段願上、当村上宿

はづれ道端ニ并木松少シ植置右之橋

かけ替修覆小道具等ニ仕候、併是ハ少々

之義ニ付橋板等諸入用惣而村普請ニ仕候

一百姓惣家数貳百壹軒

一惣人別八百九拾三人

〔用語〕

・御上水 …… 玉川上水

・自普請 …… 村の経費で行う土木建設工事

・中川八郎左衛門 …… 万治元(1658)～天和元(1681)年までの小川村支配代官

「解説」

村内に架かる橋と村の家軒数、総人口を紹介しています。当村明細で橋は七ヶ所と記されていますが、享保十九（1734）年では五ヶ所、宝暦四（1754）年では六ヶ所になっています。また、上宿道端に并（並）木松を植樹し、橋の普請工事などに利用していたとあります。実践講座第二回目『検地帳』で紹介した「小川村地割図」にも、よく見ると松林の絵が描かれています。これらは原生林ではなく、村人の生活を支える為に植樹し、大切な資源とされていました。さらに、総家軒数と人口の記載があります。小川村の家数と人口を示した最も古い史料は正徳三（1713）年の帳簿ですが、これによると総家軒数が二百五軒、人口九百二十三人となっています。以降、近世後期には人口千人を超え増加傾向となります。詳しくは『小平市史（近世編）』第四節「1・家数と人口」を御参照ください。

次に文字を見ていきましょう。

「橋」は木偏が手偏の様に、旁「喬」は

「右而」の様に見えます。

「野」は、偏「里」が「田」に、旁「予」

が「予十土」に構成された「野」の異体字です。

「水」は難解ですがこの形が

典型です。

「何連」で「いずれ」と読みます。

「れ」の変体かなは他に

「礼」

があり、これが字母（仮名の基となった漢字）です。

「古来」も簡単な漢

字の様で読みづらいですね。

「口」の部分が「マ」の様に見えるのがくずし字の

特徴です。

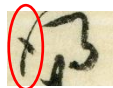
「来」は中の縦棒が全て横棒になっています。

「平」も同様、

中の縦棒が横棒に見えます。

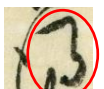
「候得共」もくずしが激しいうえ字間が凝縮

され読みづらいですが、頻出語句です。



「得」の行人偏「彳」はこの形が一般的

です。『村明細⑤』参照)また、旁

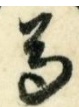


を「る」の様にくずしますが、





「守」、



「馬」、



「高」、



「寺」など、近似した文字が多く注意

が必要です。



「遠」代官所の



「官」、



「道」は特徴的ですが、これが

典型的なくずし方です。このまま覚えましょう。特に




「遠」は難解です。くず

し字ではしんによう「し」が



下部の僅かに表記されるのみとなります。今回

仮名で登場した「」もしんにようです。



「当」は旧字の「當」、



「数」



は略字の「」の表記です。



「惣而」で(すべて)と読みます。他に「都而」すべて

と記される場合もあります。漢数字



「」(一)、「」(二)、「」(拾)



「拾」

は覚えましたか。特に



「拾」は偏の最終画と旁の二画目が繋がっていて難解です。

今回「古」で説明した「口」の特徴も見られます。

